１　取組名称

地域で生活する子どもと母親を講師とした小児看護学教育プログラムの構築

２　対象科目名

成長発達看護学演習（小児）
小児看護保健行動科学Ⅰ

３　取組実施代表者名

健康福祉学部看護学科　准教授　種吉 啓子

４　取組年度期間

2017 年度（１年間）

５　取組の概要

看護学は対象者と向き合い理解することから始まる。しかし、近年、少子高齢化、核家族化を背景に子どもと接した経験の少ない学生が多く、小児看護の対象である子どもを理解することが非常に難しい現状がある。そのため、DVD の視聴覚教材、保育士や心理士からの特別講義の開催など、試行錯誤を繰り返してきたが、実際の子どもや母親とのやり取りができないという限界があった。

そこで、小児看護の対象である子どもと母親に向き合い理解を促進するための足掛かりになるような演習を行うために、大学院科目との共同開催で、NPO 法人ママの働き方応援隊の「赤ちゃん先生」プログラムを活用した「地域で生活する子どもと母親を講師とした小児看護学教育プログラムの構築」に着手する。

2016 年度には、試験的に「赤ちゃん先生」を導入し、演習を行った。その後に行われた小児病棟での実習において、例年よりも子どもとの関わりに戸惑う学生が少なく、また早期から子どもと向き合おうとする学生の姿が見受けられた。このように、学生からも概ね高評価を得た授業ではあったが、学生 5～7 名に子どもと母親 1 組という配置であったことから、学生に対して関われる子どもと母親の人数が少なく、全ての学生が能動的に演習に参加できたかは課題が残った。そのため、2017 年度は、学生 3 名に対して子どもと母親 1 組という配置を行うことで、より効果的でかつ充実したプログラムを展開する。

６　事後評価の総合評定

３．９　※審査会（教育担当副学長及び部局長構成）の審査員が行った５段階評価（５～１）の平均点

７　事後評価に関する審査会での主な意見

○対象者に向き合い理解するという看護学の基本に関して、小児看護を素材にして、学生に実体験を得させることに成果を上げているだけでなく、他の隣接領域にも方法論を応用できる可能性も示している。

○健康な子供やその母親と接することで、将来の小児看護に生かせるよう、様々な子供の状況を理解し、適切に状況判断できる能力を養うことができる。

○NPO 法人との連携が前提となっており、正課における、その協力体制の維持をしっかり考えておくのがよい。